

人や弱い立場の人々に救いの手をさしのべましょう。」
と、訴えました。

このように、多くの人たちが貧しい人やみなし子を救う仕事に協力するよう働きかけました。六十八歳になっても、その力はおとろえず、益々活動を広げ、お金持ちの婦人をさそい、寄付金を集め、貧しい人々のためにつくしました。

明治三十年（一八九七年）一月、ついに岩子は、過労のため心臓病を起してたおれてしまいました。すぐに、共立病院（今の福医大附属病院）の院長の治療を受けましたが、病気は悪くなるばかりでした。それでも、岩子は、ベッドにねながら考えることは、貧しい人々の生活です。岩子は、見舞いにきた人々に苦しい息づかいの中で、貧しい人を救うことを重ねてたのむのでした。

明治三十年（一八九七年）四月十九日、六十九歳の岩子は、ついに永い眼り